

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：32670

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13136

研究課題名（和文）近世フランスにおけるカルテジアンと修辞学の伝統 ラムスからベルナル・ラミへ

研究課題名（英文）The Cartesians and the tradition of rhetoric in early modern France : from Petrus Ramus to Bernard Lamy

研究代表者

久保田 静香 (KUBOTA, Shizuka)

日本女子大学・文学部・准教授

研究者番号：60774362

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：16世紀のラムス主義と17世紀のデカルト主義の二大思潮に軸足をおき、近世フランスにおける学芸の特徴の把握に努めた。そこで、記憶術をめぐるデカルトの初期思想に着目しつつラムス主義との関連性を再検証したうえで、ラムス主義とポール＝ロワイヤル派の文法理論と論理学の比較検証をおこなった。また、17世紀後半に熱烈なデカルト主義者として知られた二人の人物に着目し、グリニャン夫人（書簡作家セヴィニエ夫人の娘）の思想およびベルナル・ラミのレトリック理論の実態の解明に迫った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

修辞学（レトリック）を中心にその近接領域である文法学や論理学をも対象とする本研究は、現在では一般的に「リベラルアーツ」の名のもとに知られる学問・教育分野への関心がある。このリベラルアーツの源流に立ち返り、ヨーロッパにおける伝統的学芸の変革の試みが、デカルトを中心とする近代思想の誕生とともに進行するありさまを捉えつつ、それらを近世フランスの言語文化に即して見極めることを目指した。これにより、「人文学」の現在と未来のありかたを問うための具体的な素材を広く一般社会に提供できるものと考えている。

研究成果の概要（英文）：I have endeavored to grasp the characteristics of the arts and sciences in early modern France, centering on the two major trends of thought, Ramism in the 16th century and Cartesianism in the 17th century. By focusing on Descartes' early thought on the art of memory, I reexamined its relevance to Ramism, and then conducted a comparative study of the grammatical theory and the logic of Ramists and the Port-Royalists. In addition, by focusing on two figures who were known as ardent Cartesians in the latter half of the 17th century, I attempted to clarify particularly the reality of the ideas of Madame de Grignan (daughter of the epistolary writer Madame de Sevigne) and the rhetorical theory of Bernard Lamy.

研究分野：ヨーロッパ文学関連

キーワード：ラムス主義 デカルト主義 ポール＝ロワイヤル ベルナル・ラミ レトリック 文法 論理学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本ではデカルト研究はもっぱら哲学研究者や一部の科学史研究者たちの手に委ねられてきたが、欧米のフランス文学研究者の間では、早くも 1970 年代にデカルトとレトリックの問題に関心が寄せられ、その後は文体論、レトリック史・文学史、ディスクール分析、語用論からの分析など、デカルトの用いる言語の特質の解明へと向かう研究が続々と現れた。1999 年に刊行されたマルク・フュマロリ監修の浩瀚な論文集 *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne 1450-1950* (『近現代ヨーロッパにおけるレトリックの歴史 1450-1950 (未邦訳)』) では、デカルトの名はもはや、なくてはならない存在となっている。

こうした国際的な研究動向を背景に、私はフュマロリに代表されるレトリック史・文学史研究の方法に依拠して当該問題の深化を図り、博士論文として結実させた(2012 年 2 月、パリ第 4 大学博士号取得)。

この博士論文中、デカルト思想の先覚者として知られていた 16 世紀のラムス主義の問題を一部扱うなかで、「デカルト以前」のフランスの学界における言語使用の実態をより詳細に捉える必要があると思ひ至り、とりわけラムスとその周辺の人文主義者の言語実践(ラテン語からフランス語へ)を、レトリック史やフランス語史の知見に拠ることで正確に見極めようとした(2015-2017 年度、学振特別研究員 PD)。以上の学術的背景に立ち、さらに「デカルト以後」の時代に照準を合わせ、ラムスとデカルト双方の知的遺産の受容と変容を、より大局的な見地に立って描き出すことが必要であると考えに至り、本研究課題に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、国内外の研究においていまだ支配的な「デカルト思想の先覚者としてのラムス」という見方の相対化を図り、第二に、デカルトやデカルト主義者によるレトリック批判の要(蓋然的知識とトポスの知の排斥)を各テキストに即した検討により洗い出し、最終的に、近世フランスで多方面から画策された学芸(文法学、修辞学、弁証学、論理学)の組み直しの動きにデカルト思想がいかに関与したかを究明することである。

3. 研究の方法

ラムスとデカルトの関係を探るにあたり、もとよりデカルト自身が残したテキストではラムスへの直接の言及が極めて限られているため、デカルトのテキストのみに頼っては実証的な論証がほぼ不可能となるという実情がある。この難題を前にして、下記の二つの道(方法)をとることによって、徐々にその解明へと近づくことが可能となるとの着想を得た。

1) デカルト主義的な側面を多く有するポール=ロワイヤル派による『文法』と『論理学』には、ラムスを直接批判する箇所が散見されることから、ラムス主義とデカルト主義の関係の具体的な側面に光をあてることができる。

2) 熱烈なデカルト主義者として知られるベルナール・ラミの手になる『レトリック、話す技法』は「ポール=ロワイヤル修辞学」との別名ももつ。このラミのレトリック書を通じて、ラムス主義とデカルト主義の相似と相違をさらに明確に引き出しつつ、デカルト主義的な立場から構築されたレトリック理論の特質にも迫ることができる。

以上はいずれも、テキストが書かれた歴史的背景の把握にもとづく文献学的方法に大きく依拠している。その際、各思想家の言語の運用面に着目し、それらの言語の各時代・各テキストにおける特別な意味と働きを重視するため、哲学や思想史研究ではなく、あくまで文学研究の分野に身をおくこととする。

4. 研究成果

(1) ラムスとデカルト

論文:「デカルトと記憶術の伝統 ラムス主義を経由して」(日本女子大学文学部紀要第 70 号、2021 年 3 月)の執筆刊行。本稿ではまず、デカルトの初期思想において、a)16 - 17 世紀ヨーロッパに普及した「記憶術」や「ルルスの術」に対する特別な関心がみられること、b)「記憶」の問題がデカルト哲学の成立自体に関与していることに着目した。そのうえで、イサーク・ベークマン(1588-1637)やランベルト・トマス・シェンケル(1547-1625)といった、ラムス主義に共鳴しつつデカルト自身とも関連のある人びとのテキストを通じて、ラムス主義的な思想がデカルトの初期思想の形成においていかなる作用を及ぼしていたのか(あるいは及ぼしえたのか)について、具体的な考察を行い、おおむね納得のいく結論を導き出すことができた。

口頭発表:上記の論文内容について第 6 回フランス近世の知脈研究会(2020 年 9 月 5 日、大阪大学)および第 59 回史学研究会大会(2020 年 11 月 29 日、日本女子大学)にて、フランス文学・思想の専門家だけでなく、美学・美術史・歴史学の専門家を前にして研究報告を行う機会があり、分野を超えた実に有意義な学术交流の機会が得られた。

(2) ラムスとポール=ロワイヤル派

口頭発表と論文：「京都ユダヤ思想学会学術大会シンポジウム」(2022年6月25日)にて「ペトルス・ラムスの「方法」と文法改革 16-17世紀に普及したヘブライ語文法書との関連において」という題目で口頭発表を実施のうえ、本発表にもとづく同タイトルの論文を執筆した(学会より依頼あり)。本稿ではラムスの弟子であったペトルス・マルティニウスによるラテン語のヘブライ語文法書が「ラムス主義の方法」にどれほど依拠して書かれたものであるかを見定め、その伝播の理由を16-17世紀のヨーロッパ・プロテスタント諸国の文化事情に照らして明らかにした。本稿は学会誌『京都ユダヤ思想 第14号』に掲載のうえ、2023年6月刊行予定である。

口頭発表：上記の研究を進展させるかたちで、2023年2月11日にフランス近世の知脈第9回研究会「ラムスと『ポール=ロワイヤル文法』 「デカルト派自由学芸改革」の文脈において」という題目にて口頭発表を行なった。ここでは、ラムスによるフランス語文法書(16世紀後半)を批判的に継承したとされる『ポール=ロワイヤル文法』(17世紀後半)の特質を、その姉妹編『ポール=ロワイヤル論理学』との関係において描き出すための予備的考察を試みた。古代ギリシアから現代思想に至るまでのラムス主義とデカルト主義の言語思想の系譜を一望し、関連する個々のテキストをとりあげ、今後の研究の大きな展望を示した。

(3) デカルト主義レトリック

口頭発表：「デカルト主義者ベルナル・ラムのレトリック理論」(フランス近世の知脈第8回研究会2021年9月11日)にて、a)17世紀後半に活躍した熱烈なデカルト主義者ベルナル・ラムの生涯と著作について概要をまとめ、b)ラムの著『レトリック、または話す技法』にみられるデカルト主義的な側面を洗い出し、c)それによって『ポール=ロワイヤル論理学』(1662)の姉妹編としての性格を明るみに出し、最終的に、d)ロマン主義思想の始祖とも呼ばれるジャン=ジャック・ルソーの思想との親近性についても示唆することで、ラムのレトリック理論が西欧近代思想の両翼ともいふべき合理主義とロマン主義の狭間に位置することの意義を確認することができた。

(4) その他

論文：「セヴィニエ夫人の手紙のなかのデカルト」(『Etudes francaises 早稲田フランス語フランス文学論集』第27号、2020年3月)では、17世紀フランスの書簡文学を代表するセヴィニエ夫人の実娘であるグリニャン夫人が熱烈なデカルト主義者で、セヴィニエ夫人自身が『書簡集』のなかで頻りにデカルトに言及している点に着目することにより、17世紀後半当時のデカルト主義者と文芸状況の関わり合いの一端を紐解いたことで、研究の視座に広がりが出た。当初の計画では男性による著作物のみを検討の対象としていたが、ここで新たに女性のテキストも扱ったことで、近世フランスにおける女性と学問およびその言語のありかたも視野に入り、本研究が今後いっそう豊かなものとなる端緒をつかんだ。

論文：青土社『ユリイカ』編集部より執筆依頼があり、同誌「偽書の世界」特集号(2020年12月号)に「アンニウスのみた起源の夢 一六世紀フランスにおける起源神話と国語意識の芽生え」と題する論文が掲載された。一般読者にも読みやすくなるよう文体を工夫し、専門的な内容をより広い読者層へと広げることができた。

翻訳：「ジャン・ボダン、『七賢人の対話』、自然宗教の起源」が、共訳書『懐疑主義と信仰 ボダンからヒュームまで (ジャンニ・パガニーニ著、2020年)の第1章として刊行された。政治思想史の分野では殊に重視されボダンが残した『七賢人の対話』という貴重な地下文書について、哲学・思想・文学の専門家をも意識して日本語で紹介する絶好の機会となった。

研究ノート：「『方法序説』と『方法叙説』のあいだで デカルト *Discours de la méthode* のタイトル訳語の再検討」と題して『総合社会科学』第34号(2022年5月刊行)に小論が掲載された。デカルトの *Discours de la méthode* の邦訳書が明治時代に初めて刊行されてから2022年に最新の訳書が出されるまでの経緯を辿り、タイトルの訳語の変遷を手がかりとして、当該著作に備わる特異かつ斬新な側面を明るみに出した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 久保田 静香	4. 巻 34
2. 論文標題 研究ノート『方法序説』と『方法叙説』のあいだで デカルトDiscours de la methodeのタイトル訳語の再検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 総合社会科学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 久保田 静香	4. 巻 767
2. 論文標題 アンニウスがみた起源の夢—六世紀フランスにおける民族神話の流行と国語意識の芽生え—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカー詩と批評—	6. 最初と最後の頁 261-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 久保田 静香	4. 巻 70
2. 論文標題 デカルトと記憶術の伝統—ラムス主義を経由して—	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 久保田 静香	4. 巻 27
2. 論文標題 セヴィニエ夫人の手紙のなかのデカルト	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Etudes francaises（早稲田フランス語フランス文学論集）	6. 最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田 静香	4. 巻 14
2. 論文標題 ペトルス・ラムスの「方法」と文法改革 16-17世紀に普及したヘブライ語文法書との関連において	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 久保田 静香
2. 発表標題 デカルト主義者ベルナル・ラミのレトリック理論
3. 学会等名 フランス近世の 知脈 第8回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久保田 静香
2. 発表標題 デカルトと記憶術ーラムス主義を経由してー
3. 学会等名 フランス近世の 知脈 第6回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田 静香
2. 発表標題 デカルトの初期思想と記憶術
3. 学会等名 第59回日本女子大学史学研究会大会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田 静香
2. 発表標題 ペトルス・ラムスの「方法」と文法改革 16-17世紀に普及したヘブライ語文法書との関連において
3. 学会等名 京都ユダヤ思想学会第15回学術大会公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 久保田 静香
2. 発表標題 ラムスと『ポール=ロワイヤル文法』 「デカルト派自由学芸改革」の文脈において
3. 学会等名 フランス近世の 知脈 第9回研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ジャンニ・パガニーニ、津崎良典、久保田静香、武田裕紀、谷川雅子、逸見龍生、山上浩嗣、谷川多佳子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 280
3. 書名 懐疑主義と信仰ーボダンからヒュームまでー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関